

Romeo and Juliet 及び *Hamlet* に於ける生と死

小 川 清

Life and death in *Romeo and Juliet* and *Hamlet*

Kiyoshi OGAWA

Abstract

Romeo and Juliet which was written not long after the so-called Plague years 1592-4, reveals some influences of the plague in the minute description and the excessive fear and hate of death; the hero's defiant attitude toward death also reflects the people's desperate wish for survival in those days who would never yield to their fate. This might partly explain why the play is full of lively aspiration for life in spite of the fact that death swallows the lovers in the end.

In *Hamlet* written several years later, the view of life suddenly turns dark and death is considered to be 'a consummation devoutly to be wished'. This rather unnatural way of thinking suggests some turn of mind caused by unpleasant and unbearable events and situations. In this paper it is examined how the darker side of the Elizabethan age and the social and mental crevices which were making their appearance towards the end of the age are mirrored in the hero's pessimistic view of life.

は じ め に

Romeo and Juliet と *Hamlet* との間には、制作年代の上では、5, 6年の間隔があるに過ぎないが¹⁾、作品全体の色調の点では、殆んど正反対と云える程の大きな開きがあるように思われる。同じく悲劇ではあるが前者には、人生に対して肯定的態度が支配的であるのに対し、後者では、世界と人間に対する暗い否定的心情が全篇を掩っているからである。

Shakespeare は *Hamlet* の中で、演劇の目的は、この世の森羅万象、人の善悪、時代の姿を鏡の如くに映し出すことにあると述べているが、もしそうだとすれば、かくも大きな相違を示す二つの作品は、それぞれに、如何なる時代の姿、如何なる人間の状況を映し出して

1) E. K. Chambers の推定では、前者は1594—5年、後者は1600—1年作となっている。

いるのであろうか。

Shakespeare の活躍したエリザベス朝時代は、英国のルネサンス期に相当し、彼の作品は中世から近代への移行期に於ける歴史の変動、社会の変化、それに伴う人々の意識の変化や思想の対立等を活写したと云われる。演劇という形式は、それらの変転を描くのに最も適した芸術形式であったが、同時に詩人であった彼は、その優れた感受性と直観力を以って、同時代人の置かれた人間の状況について鋭く洞察し、世界と人間についての独自のヴィジョンをその表現形式の中に盛り込んだと云える。

ルネサンス時代は、通常、中世との対比に於いて、人間性の解放の時代、この世の生を謳歌した時代と考えられており、Shakespeare の作品も大筋に於いて、生の文学、人間性謳歌の文学の系譜に属すると見てよいであろう。しかし、ルネサンスによってもたらされた近代は、今日までの歴史が証明しているように、必ずしも安定と調和の黄金時代ではなく、むしろより短い周期で反復される変動の時代の到来を意味していたのであり、それに伴う生の不安と危機意識に、近代人は絶えずさいなまれるという反面を持っていた。エリザベス朝時代は、英国の歴史の中でも稀に見る長期安定と繁栄の時代であったが、女王晩年の頃となると、それまで抑えられていた不安材料が次第に顕在化し始め、それと軌を同じくする形で、Shakespeare の作品の中にも次第に暗い否定的要素がその主座を占めるようになってくる。所謂悲劇時代が到来するのである。

Romeo and Juliet は主人公達の死に終るという意味では確かに悲劇であるが、作品に充溢しているのはむしろ若々しい青春の叙情であり、生の激しい燃焼であって、同じ頃に書かれた多くの喜劇作品とはほぼ同質の精神に貫かれていると云ってよい。そこにはまだ、生の矛盾や生の苦悩は見られない。ところが *Hamlet* になると生の様相は一変する。生は苦渋に充ちたものとなり、その亀裂から死が深淵を覗かせるのである。

本試論は、*Hamlet* の中に表現されている生と死の様相を、特に主人公 Hamlet の死の意識を中心として、作品の中に辿って行き、それによって作者が何を映し出した何を暗示しているかを、当時の社会的状況との関連に於いて、考察しようとするものであるが、それと対比させる意味で、先ず *Romeo and Juliet* の中に表わされている死の意識について検討しておきたい。

1. *Romeo and Juliet* の場合

Romeo and Juliet は冒頭の序詞の中に規定されているように、死の刻印を押された恋 (death-marked love) を主題としており、当然死についての言及および描写が多い作品であるが、そこに二つの顕著な特色がある。一つは死に関する描写が極めて詳細且克明であるこ

と、今一つは死に対する嫌悪感が顕わに表明されていることである。前者については、例えば, Friar は服薬によって仮死状態に陥っていく過程を,

.....For no pulse
Shall keep his native progress, but surcease.
No warmth, no breath, shall testify thou livest.
The roses in thy lips and cheeks shall fade
To warmy ashes, the eyes' windows fall
Like death when he shuts up the day of life,
Each part, deprived of supple government,
Shall stiff and stark and cold appear like death. (IV, i, 96-103).

と、実際の死さながらに、実に詳細に而もリアルに説明しており、また Juliet が、やがて運ばれる筈の墓場に想像を馳せて語るせりふの中にも、墓場のよんど今にも窒息しそうな空気についてのリアリスティックな描写や、

O, if I wake, shall I not be distraught,
Environed with all these hideous fears,
And madly play with my fore fathers' joints
And pluck the mangled Tybalt from his shroud,
And, in this rage, with some great kinsman's bone
As with a club dash out my desperate brains? (IV, iii, 49-54)

のように、死者の骨に囲まれた自分の姿についての極めて具体的な鬼気迫る描写がある。全般に浪漫的、叙情的色彩の濃いこの作品の中にあって、これらの描写は異様な程に生々しく、現実味を帯びていると云えるであろう。

後者に関しては、例えば Romeo が Juliet の横たわる墓を開きながら語るせりふ、

Thou detestable maw, thou womb of death,
Gorged with the dearest morsel of the earth,
Thus I enforce thy rotten jaws to open,
And in despite I'll cram thee with more food. (V, iii, 45-8)

の中に、死に対する嫌悪あるいは侮蔑の感情が殆んどむき出しに語られているのを見ることが出来る。また Romeo は死を擬人化して 'the lean abhored monster' と呼び、好色な死から恋人を守るべく共に死のベッドに横たわるのだとも語っており、そこには死への嫌悪と同時に激越なまでの死への挑戦がある。Romeo は厭う可き死に挑戦するが故にむしろ勢い

余って死の中に跳び込んでいくようにすら見えるのである²⁾。

死についての克明な描写は、一つには中世末期から盛んになった宗教的な *memento mori* (死を憶えよ) の芸術や文学の伝統の中に位置付けて理解する必要がありそうに思われるが、他方、作者自身、自分の眼で急死する人の過程をつぶさに見る機会があって、上記の Friar のリアルな描写に反映していることも充分考えられるであろう。

1592年から94年にかけて、ロンドンに疫病が大流行し、その間劇場が閉鎖され、Shakespeare の所属する劇団もロンドン退去を余儀なくされたことは周知のことである。この疫病は猖獗を極め、二年間にロンドン市民の約6分の1が死んだと云われる。その頃に書かれたと推定される *Venus and Adonis* について M. C. Bradbook 教授は、猪に脇腹を突かれた Adonis の死は、四肢のつけねに症状の現れる tubonic pestilence による死であろうと推測しており、さらに、*Romeo and Juliet* の主人公達の死は、疫病の死ではないがそれと同じスピードで死は訪れると、この作品に対する疫病流行の影響を示唆している³⁾。この作品が1595年頃の作とすれば、疫病による死の記憶はまだ生々しく、その影響が色濃く現れたとしても不思議ではないであろう。ところで問題は、この疫病による死に対し、作者をも含めて当時の人々がどのように感じまたどのように反応したか、そしてそれが作品の中にどう反映しているかということである。

ヨーロッパ全土に14, 5世紀から波状的に幾度か大流行した疫病は、中世から近代への歴史の変動の不安とも相俟って、人々に人生の無常を悟らせる宗教文学あるいは死の芸術(どくろを好んで描く絵画等)を数多く生み出す原因になったと云われる。しかし16世紀後半になると、人々の意識は漸く中世的思考から脱却し、死後の平安よりはむしろこの地上の生の充実に重点を置く考え方に変って来たようである。度重なる疫病の試練が次第に彼らを強靱にしていっただという事情もあるであろう。死の脅威は相変わらず続いていたが、人々はむしろその脅威に挑戦し、生の主権を主張し始めたのである⁴⁾。1593年に疫病で服役中の弟を失った John Donne の書いた 'Death, be not proud.....' で始まるソネットは、この時代の死に対する挑戦の一端を伺わせるものであるし、また Shakespeare の数多くのソネットの中に、大鎌を振る暴虐な「時」の支配に打ち克つ手段が主題としてくり返し歌われているのも、この時代の精神と決して無縁ではないであろう。

Romeo and Juliet の中でも、例えば Mercutio は手傷を負って思いがけない死に際会し

2) cf. L. L. Brodwin: *Elizabethan Love Tragedy* (New York Uni. Press, 1971) p. 59.

3) M. C. Bradbrook: *Shakespeare The poet in his world* (Weldenfeld & Nicholson, 1978) 4 The poet of the plague years.

4) この推移は小間瀬精三「死の舞踏」(中公新書)に詳しく書かれている。

た時、

No, 'tis not deep as a well, nor so wide as a church door, but 'tis enough, 'twill serve. Ask for me tomorrow, and you will find me a grave man. I am peppered, I warrant you, for this world. A plague a' both your houses. (III, i, 93-8)

と冗談をとばしさえするのであるが、死に直面しながらそれをしゃれのめそうとする精神のしたたかさは、疫病の脅威の中で、仮面をかぶり踊りながら死体の穴の淵まで敢て赴き、死に挑みかかった当時の一部の人々の態度に通じるものがある⁵⁾。彼は死を静かに受容しているのではない。若い身での時ならぬ死は痛恨の極みであって、それ故に 'A plague a' both houses.' と三度まで呪いの声を発するのである。

Mercutio の場合とは、現われ方は違うが、この作品の主人公達も、死に対して基本的には共通の精神あるいは態度を持しているように思われる。Juliet は死の不安と恐怖に戦きながらも、敢て薬を飲むことによって、彼女の生そのものである Romeo との愛を成就しようとするのであるし、また Romeo も死を '厭う可き骸骨の怪物' と嫌悪しながらも、Juliet を奪い返すべく、敢て死の中に飛び込むのである。彼らの運命は、死の刻印を押された恋として、外的に規定されてしまっているのであるが、その運命に敢て挑戦する彼らの姿には多くの人々が死に直面しなければならなかった状況と、その事態にたとえ絶望的であってもなお立向おうとした人々の強烈な生への意欲を垣間見させるものがあるように思われる。

この作品は、結局は死が支配する悲劇であるが、全体の印象としては、むしろ死を凌駕する生（この場合は二人の恋）の躍動感に充ちており、その生は、死という闇をひきさいて光る一瞬の稲妻の美しさに比せられるものである。その意味では、この悲劇が、制作年代の上で、生の讃歌とも云うべき喜劇群の中に一つだけ混在しているとしても決して不思議ではない。

2. Hamlet の場合 (1)

上述の *Romeo and Juliet* に於ける生と死のパターンは *Hamlet* では完全に逆転し、生こそ厭う可きものであり、死はむしろ願わしいものとなる。*Hamlet* は息を引き取る寸前、後を追おうとする Horatio の手を止めて、

If thou didst ever hold me in thy heart,

5) M. C. Bradbrook: *Shakespeare The poet in his world* p. 66.

Absent thee from felicity a while,
 And in this harsh world draw thy breath in pain
 To tell my story. (V, ii, 328-31)

と懇願するが、ここに語られている、この世の生を苦痛と見、死を至福と見る厭世観は、この作品に一貫して流れる基調音となる。それは、主人公と彼を取り巻く世界との軋轢から来る不協和音を暗示するが、Shakespeare はそのような厭世的な心情を吐露する人物を通して、世界と人間との如何なる関係を描き出そうとしたのであろうか。

ここでは、死は当然 Romeo の場合よりは遥かに複雑な相貌を帯びることになるが、Hamlet の抱く死の意識を一応、行動 (action)、倫理 (morality)、存在 (existence) の三つのレベルで捉え、その性質及び奥行きを検証することによって、それが当時の如何なる状況、如何なる精神を反映したものであるかを考察してみたい。

まず、ドラマの基本である行動のレベルに於いては、*Hamlet* も *Romeo and Juliet* と同じく、死に運命づけられた人間の悲劇である。但し、Romeo の場合とは違って、主人公 Hamlet は、自分に課せられた行動の必然の帰結としてその果てに待ち受けている死を充分予想しており、最終的にはその死を甘受する。

Hamlet は周知のように、13世紀頃から流布していた「ハムレット伝説」あるいは Kid の *UrHamlet* を種本として書かれたもので、復讐の成就即主人公の死という当時の復讐悲劇のパターンが、基本的枠組となっている。復讐というのは、云わば私怨を晴らす行為であり、法の裁きに基かない私的正義の主張であって、法的秩序の確立した社会では、現実には容認されない行為である。従って、文学あるいは劇の物語としては、必ず主人公の死を伴う復讐悲劇という形で当時流行していたものと考えられるが、Shakespeare も一応その線を踏襲しており、彼の *Hamlet* も劇進行そのものが既定のこととして死を孕んでいると云える。しかし、ここで、見逃してならないのは、元のストーリーのように単純に復讐の結末としての死を外面的に描くのではなく、主人公をして自らの死を予見させ、迫り来る死に対する覚悟を重大関心事として作品の中に盛り込んだということである。

劇の後半、劇中劇の上演を堺として、王と Hamlet との関係が急速に緊迫化し、Polonius 殺害、Hamlet の英国行き、突然の帰国、Ophelia の死、Leartes との試合と矢継ぎ早に局面が急転回する中で、作者は相当に長いスペースを割いて、5幕1場の墓場の場面を設定し、Hamlet と墓堀り人夫また Horatio との間に、人の死についての問答を行わせている。Hamlet は英国行きの船上で王の陰謀を見破り、辛うじて死を免れ、帰国した許りであるが、次々に掘出されるどくろを手に取りながら、延臣、法律家、道化達の変わり果てた今の姿に彼独特のシニシズムを容赦なく浴びせるのであるが、最後に Alexander 大王とビヤだるの穴

ふさぎとの対比に至って、次のように云う。

Alexander died, Alexander was buried, Alexander returned into dust; the dust is earth; of earth we make loam, and why of that loam whereto he was converted might they not stop a beer-barrel? (V, i, 188-92)

これは表面的には、世の権力者に対する辛辣な諷刺を含む軽口であるが、この執拗な論理の底には、すべて土に帰って行かねばならない人間の運命への想念がわだかまっている。この場面は、劇の構成上は数多くの死が現出するラストシーンへの布石であるが、主人公の意識の面に即して云えば、近い将来起る筈の己れの死を予測し、それに対する心の備えを為しつつある場面であると云えよう。事実、Hamlet は直ぐ後のシーンで、Leartes との試合にある不吉な予感を覚えた時、Horatio の中止の勧告に対し、次のように自らの覚悟を述べるのである。

Not a whit, we defy augury. There's a special providence in the fall of a sparrow. If it be now, 'tis not to come; if it be not to come, it will be now; if it be not now, yet it will come. The readiness is all. Since no man has aught of what he leaves, what is't to leave betimes? Let be. (V, ii, 202-6)

この中の 'we defy augury.' は Romeo が Juliet の死を聞いた時の 'I defy you, stars.' を連想させるが、Hamlet が defy するのは運命に対してではなく、自分の不吉な予感に対してであり、彼は迫り来る死の運命をむしろストイックな態度で受け入れようとしている。この両者の差違は、Hamlet が劇の発端からその場面に至るまでに経て来た特異な経験から生れ出したものであって、彼の態度を理解する為には、その経験が如何なるものであったかを辿ってみなければならない。

Shakespeare の描いた Hamlet 像の魅力の一つとして、彼の鋭い倫理的感覚を挙げる事が出来ると思う。彼の研ぎすまされた正義感の鋒先は当然、先ず第一に王 Claudius の不正に向けられる。先王を殺し、母を汚し、彼の相続権を奪い、さらに英国王宛の親書から露見するのであるが、彼の命すら狙っている Claudius はまさに人類の腫瘍 (canker of our nature) であり、それを取除かないことは地獄落ちの大罪であるとすら彼には思われるのである。(V, ii, 64-70) 他方、王によって汚された母 Gertrude も単なる被害者ではなく、自らの意志によって王の許に走ったのであり、悪の加担者とすらなっている所に、彼の置かれた立場の複雑さがある。

Dover Wilson は、T. S. Eliot の *Hamlet* 論に関連し、当時兄の未亡人と義弟との結婚は近親相姦と見なされており、近親相姦は今日とは比較にならない程怖る可き大罪と見なさ

れていたので、Hamlet のオーバーとも受け取れる感情に充分見合うものだという趣旨のことを述べているが⁶⁾、肉親の不義不正が、倫理的に潔癖な若者の心情を激しく襲うという点に、この作品の主要なモチーフの一つがあると見てよいであろう。

当時、王というのは、一国のあるいは世界の中心的存在と見なされており、従って、王室に起る不義不正は世界全体の乱れとして、あるいは自然界の異常な出来事として現れるものと考えられていた。冒頭の幽霊出現は端的にその種の世界の乱れを暗示するものである。(Macbeth その他にも同様の例がある。) また王室の腐敗は、その周辺の人々にまで少なからぬ影響を及ぼすものであって、Hamlet の出会う人々も何らかの形でその毒に当てられており、彼の嫌悪感を一層かき立てることとなる。王の大鼓持の道化となった Polonius を初めとし、自ら知らずして彼をわなにかける罠りとなっている恋人 Ophelia、王のスパイとして彼の心を探ろうとする昔の学友達、彼の周辺には、最早心を許せる信頼も平和もない。この世界はまさに、彼にとっては、雑草の生い茂る庭、関節の外れてしまった身体、あるいはより端的に云って牢獄そのものに化している。

世界に対してこのような認識を持つ Hamlet にとって、この地上の生が、喜ばしく願わしいものであり得る筈がない。第一独白で開口一番語る、

How weary, stale, flat, and unprofitable
Seem to me all the uses of this world! (I, ii, 133-4)

という厭世的感情は、先に引用したラストシーンの厭世観へと引き継がれて行き、この基調音を響かせるせりふがほぼ全篇に亘ってちりばめられることとなるのである。

ところで、Hamlet の厭世的せりふの中に、彼が直接被害をこうむっている個人的なものでなく、より一般的あるいは客観的なこの世の不正不義への言及が時折顔を覗かせていることに注意しておかねばならない。例えば第三独白の中の、

For who would bear the whips and scorns of time,
The oppressor's wrong, the proud man's contumely,
The pangs of despised love, the law's delay,
The insolence of office, and the spurns
That patient merit of the unworthy takes,
When he himself might his quietus make
With a bare bodkin? (III, i, 70-6)

というせりふは、その最も典型的な例であるが、ここには作者自身の考え方、あるいは彼の

6) John Dover Wilson: *What happen in Hamlet* (Cambridge, orig. 1935, rep. 1974) Appendice D

心に映じた当時の社会状況及びその中から生れ出たある種の思想傾向が反映されていると思われる。ルネサンスという時代について、我々は、中世を暗黒時代と見る史観に影響されて、殊更に明るく見勝ちであるが、実際は、変動期特有の不安定な時代であって、目に余る悪行や不公正が羅り通る暗い側面もあったと考えられる。前に言及した5幕1場の墓場のシーンで、Hamlet は一つのどくろをへつらい上手な欲深い延臣と見、別のものを詭弁と策略を弄して他人の地所までかすめ取る法律家に見たてて毒づいているが、同様の例は、他の作品（例えば *King Lear*）などにも屢々見られ、作者が身近に見聞きした当時の社会の様相がそのまま写し出されていると見て差支えないであろう。またその様な社会の様相を反映して、この人生には死よりも耐え難い事柄がおびただしくあり、死はむしろよろずの苦しみを癒す薬と見なす考え方が当時可成り一般化していたようである⁷⁾。Shakespeare もこの思考のパターンに乗かって、例えばソネット66番の中で、この世の不正を実に14行中11行に亘って列挙し、

Wearied with these for restful death I cry

と歌っているし、また、比較的初期の歴史劇の中でも、特に苛酷な運命に見舞われる人物の口を通して（例えば *King John* の Lady Constance など）、ほぼ同様の考えを語っている。従って、この種の厭世観は、*Hamlet* に突出して来たものでもなく、また特有のものでもない。ただ、それが、一作品の中心人物の基本的な考え方としてあらわされていること、さらにその人物を殊に正義感の強い、感受性の鋭敏な人物として描くことによって、その思考法に血を通わせたという点で、*Hamlet* は矢張り、他に比類を見ないユニークな地歩を占めるとは云えるであろう。

今一つ *Hamlet* のユニークな点を挙げるとするなら、Hamlet の厳しい目は、周囲の人々の不正に向けられる許りではなく、時として自分自身にも向けられるということである。2幕2場の役者達の来訪のシーンで、絵空事のせりふのために顔面蒼白、目に涙さえ浮べる役者の姿に、決断を欠くわが身の俯甲斐なさ責める第二独白、また4幕1場の英国行きの途中出会う、たまごのから程の僅かな土地の為に身命を賭して兵を率いる Fortinbrass の姿に、わが身の法儒を恥じる第四独白は、夫々、Hamlet の内攻する目を感じさせるが、3幕1場の尼寺のシーンで Ophelia に投げかける次のせりふの中に、それが最も苦々しい形で表れている。

I am very proud, revengeful, ambitious; with more offences at my beck than I have thoughts to put them in, imagination to give them shape, or time to act them

7) 同様の考えはモンテニユ「エセー」の中に散見される。

in. Why should such fellows as I do crawling between earth and heaven? We are arrant knaves, all; believe none of us. Go thy ways to a nunnery. (III, i, 125-30)

ここには、不倫の寢床へ急いだ動物にも劣る母の姿の残像が重なっているので、冷静な自己吟味とは云えないが、天地の間を這りずり回っているという自嘲の言葉は、彼の抱く厭世観が、決して概念的な通り一遍のものではあり得ないことを示唆しているとは云えよう。

ところで、この世界にはびこる悪不正の故に生じる厭世観というのは、考えて見れば、その悪と戦い打破ろうとする意志や決断や行動によって克明出来るものである。少くとも打克とうとする努力は可能な筈である。実は Hamlet もそのように考えない訳ではない。第三独白の中で、

Whether 'tis nobler in the mind to suffer
The slings and arrows of outrageous fortune,
Or to take arms against a sea of troubles,
And opposing end them? (III, i, 57-60)

と、問の形に於いてではあるが、自ら剣をとって海なす困難に立向う可きことを考えており、また自らの優柔不断を激しく譴責する第二、第四独白でも、夫々最後には自分を行動に狩り立てる為の方策について語るのである。ところがそれにも拘らず、Hamlet の口からは、志を遂げた後の展望あるいは生の世界に希望を託すような言葉は遂に出て来ない。彼の意識は決してプラスの方向には浮上せず、絶えずマイナスの方向つまり死の意識へと沈下して行くのである。これは何故か。これまで考察して来た行動及び倫理の問題とも分ち難く絡み合っているのがあるが、人間をより根源的に規定する存在のレベルまで下りて、その原因を探してみなければならない。

3. Hamlet の場合 (2)

Shakespeare の Hamlet 像の際立った今一つの特色は孤独にあると云うことが出来るであろう。婚姻の式を挙げた許りの王と王妃、そしてきらびやかな延臣達の居並ぶ宮廷の中で、黒い喪服に身を包んで登場する Hamlet の姿は、観客の心に先ず異和感、孤絶感を強く印象付ける。しかも一人になった Hamlet は開口一番、

O, that this too too solid flesh would melt,
Thaw, and resolve itself into a dew!
O, that the Everlasting had not fixed
His canon 'gainst self-slaughter! (I, ii, 129-32)

と自らの死を希うのである。

Shakespeare は各作品に於いて、主人公の登場のさせ方にそれぞれ工夫を凝らしたと思われるが、Hamlet が最初に登場する1幕2場の主役は王 Claudius であって、Hamlet はいわば影の存在でしかない。Hamlet が我々の視座の中心を占めるのは、王達が退場した後の独りとり残された彼の独白に於いてである。この演出は意味深い。それは Hamlet の置かれた立場を象徴すると同時に、彼の内部の意識とも密接に対応しているからである。父王の死、叔父の即位、母の再婚と矢継ぎ早に彼の留守中に生じた事態は、彼が曾って所属していた世界、信頼と期待を寄せることの出来る秩序の世界から一挙に彼を突き放してしまった。少くとも彼にはそう思えるのである。そのような彼に対し、母と王は口を合せて、死は人の世の常であって、一定期間喪に服した後は喪服を脱ぎ、日常の生活に復す可きであると説く。特に王は、

But you must know your father lost your father;
That father lost, lost his; and the survivor bound
In filial obligation for some term
To do obsequous sorrow. But to persevere
In obstinate condolment is a course
Of impious stubbornness; 'tis unmanly grief. (I, ii, 89-94)

と説き、それ以上喪に服し続けることは神に対し、死者に対し、自然に対して罪悪であると語ると共に、次の王位継承者として、彼らの子として彼らの世界に帰ってくるよう勧めるのである。王の説得は雄弁である許りでなく、その論理は首尾一貫して反論の余地がない。ただ、父はその父を失い、そのまた父も云々の論理は、人々の所属する世界が自然の理によって固く保たれており、何の亀裂も、非連続もあり得ない、あるいはあり得ないと信じられている場所でのみ成立つ論理である。Hamlet はそれに対し、敢て反論せず、一見服するかの如く見せかけるけれども決して承服している訳ではない。そのような論理が通用する世界から完全にはみ出してしまっていることを自覚しているからである。それは決して王達に明かしてはならない心の秘密であり、彼らが退出した後、独白の形で語る他ない孤独な自覚である。

Hamlet はShakespeare の作品の中で、最も独白の多い作品である。独白は通常、傍白と共に、登場人物の心中を観客に伝える為の、当時の演劇のコンヴェンションの一つとして了解されているものであるが、Hamlet の場合は、主人公の孤独を印象付ける手段として殊更に多用されていると見られるふしがある。

ところで、先に引用した Hamlet の第一独白の冒頭に出てくる自殺願望は、彼の意識の

中で如何にして生じ、何を意味するのか。続いて語られるせりふから推測すると、早過ぎる、しかも先王と似ても似つかぬ叔父との近親相姦の寢床へと走った母の再婚がその原因である。母の持つ女としての脆さ、不見識、その行為の邪悪さが切迫した口調で繰返し語られるのである。しかし、ここで Hamlet は母の再婚を、単に道義の問題として倫理のレベルで論じているのであろうか。それもあるが、それ以上に、母の不倫によって母と子のきずなが決定的に断ち切られたことに対する怒りと悲しみが噴出しているのである。父の死と叔父の即位によって彼の帰属していた世界は突如として失われた。さらに、本来ならそのような事態の中で辛うじて彼をそこに繋ぎ止めておく筈の母とのきずなが断ち切られてしまったのである。そのショックが、殆んど反射的に Hamlet の心に自殺への願望を生むのである。自殺は、心理学的には深淵を母を回帰を求める欲望だと云われるが、それまでの生を支えていた世界と自己との間に亀裂が入る時、それは鋭い自我の意識を生むと同時に、孤独に耐え切れない自我は、死即ち誕生以前の状態への回帰を殆んど無意識的に希うに至るのである⁸⁾。自殺への願望をいきなり口にする Hamlet は、逆に、その事を通して、彼がそれまで帰属していた世界との断絶を、殊にそのパイプ役でもあり得た母との断絶を如何に痛切に感じ取っていたかを語っているとも云える。

Hamlet の母に対する感情を、単に不義とか罪に対する反撥としてでなく、それによってもたらされる関係の断絶とそこから生じる孤独と絶望として捉える時、その後続く母子対決の場面あるいは母子の断絶がオーバーラップして悲恋への運命を辿る Ophelia との関係をよりよく理解出来るように思われる。3幕4場の母子対決のシーンで、Hamlet の言葉の刃に胸を引き裂かれた Gertrude が悔悟の涙を流す時、本来ならそこで母子の和解が成立してよい筈だが、そしてまさに和解が成立しそうになった時、Hamlet は突如前言をひるがえして、

Queen What shall I do?

Hamlet Not this, by no means, that I bid you do;
 Let the bloat king tempt you again to bed;
 (III, iv, 181~)

と、口汚なく母を罵り母への不信を顕わにする。ここには王への告げ口を牽制する反語的意味合いも含まれているかも知れないが、その残酷さには、英国追放という切迫した状況の中で母はも早自分に所属しないという当初の認識が、突如彼の意識の中に立戻って来た為と考えられる。Ophelia との悲恋については、この小論で詳しく述べるいとまはないが、Ophelia

8) International Encyclopedia of the Social Sciences, suicide, psychological aspects.

が敵方の囷になっているという外的事情にのみその原因があるのではなく、Hamlet の意識を絶えず死の方向へと追いやって行く同じ要因が、生の象徴そのものである「五月のばら」Ophelia⁹⁾ との愛を枯らしてしまうのだとだけ述べておこう。

人がそれまで依拠して生きて来た世界から切断され、孤絶の中に追いやられる時、その後の人間関係の上に重大な影響を及ぼす許りでなく、その人自身の精神の内部構造に深刻な事態を生み出す。Hamlet は Ophelia の言葉によれば、貴人として、武人として、また学者として世の鑑であり、人々の期待と憧れの的であったし(Ⅲ, i, 150—53)、彼自身 Rozenkrantz, Guildenstern に語っている人間の優れた諸能力、即ち, noble reason, infinite faculty, express and admirable form and movement, angel-like action, god-like apprehension (Ⅱ, ii, 296—99) を備えたルネサンス期の理想的人間であったと云ってよい。つまり、彼自身その時代の秀れた価値の具現者であると共に、それらの価値を判断する明確な基準を持っていたのである。しかしそれらの価値が積極的意味を持ち得るのは、それが培われ育てられた基盤が不動である限りに於いてであろう。Hamlet が、美しい大空が 'a foul and pestilent congregations of vapours' に過ぎず、その様に秀でた人間すらも自分にとっては、'quintessence of dust' でしかないと言語する時、その基盤が失われ、その基準が彼の内側で完全に崩壊してしまっていることを示している。その崩壊は、叔父の即位、母の再婚と同時に始まり、1幕3場の父王の幽霊との出会いによってほぼ決定的となるのであるが、この世の何ものをも信じる事が出来ない(彼は幽霊とて悪魔の仕業かも知れないと疑う)という心の中に生じた空洞が、以後、彼の言動を支配していくこととなる。彼がそれまで見て来た一切のもの、大地も大空も、就中人間は秀でて美しいものであったが故に、彼の経験する落差は大きく、その結果生じた彼の態度は、人々の目に、常軌を逸したものの狂気となって現れる。(「ハムレット伝説」に含まれる佯狂の要素もあるが、真の狂気に近い描写の方が多いようである。)

ところで、彼の内なる価値体系の崩壊は、外に向った場合は、痛烈なシニズムとなって現れるのであるが、ここで特に注目したいのは、それが内攻した場合、底知れぬ憂うつとなり、死への願望となるという点である。1幕から3幕にかけては、時間的に比較的緩かなテンポで進行していくが、その間、外界から孤絶した Hamlet の想念は内に向って次第に深まって行き、3幕1場の第三独白に於いてほぼその頃点に達する。第一独白の自殺への言及は、母の再婚のショックからくる反射的反動的要素がなきにしも非ずであったが、第三独白には、孤独な沈思の果てに己れの死の深淵を凝視するに至った人間の姿がある。

9) Wilson Knight: *The Imperial Theme* (Methuen, orig. 1931, rep. 1961), Chap. 4 Rose of May.

—to die—to sleep
 No more; and by a sleep to say we end
 The heart-ache, and the thousand natural shocks
 That flesh is heir to; 'tis a consummation
 Devoutly to be wished. To die—to sleep—
 To sleep! perchance to dream. Ay, there's the rub;
 For in that sleep of death what dreams may come,
 When we have shuffled off this mortal coil,
 Must give us pause. There's the respect
 That makes calamity of so long life. (III, i, 60-9)

死は眠り—眠りは夢を見ること、その夢に何が立現れるかも知れぬ、その恐怖の故にむしろ耐え難いこの世の生を選び願わしい死を思い止まるというのである。これは不思議な、屈折した論理である。Shakespeare は曾って *Richard III* の中で、Clearance に死後の世界の夢を見させ、彼が夢の中で経験した恐怖をリアルな筆致で克明に描いたことがある¹⁰⁾。ここではそのような具体的描写を控え、暗示的手法にとどめているのであるが、'What dreams may come' あるいは 'the dread of something after death' という言葉の背後には、Clearance の恐怖とはほぼ同種の内容を想定していると見てよいであろう。この点を踏まえておかないと、この不思議な論理は、殊に今日の我々の目には、単なる逃げ口上あるいはナンセンスと映ってしまう怖れがある。ところで、ここで重要なのは、Hamlet が死を極めて主体的に、即ち、自分自身が陥っていくもの、さらに死後まで自分を襲うかも知れない何ものかとして、ある戦慄を以て見つめているということである。このように極めて主体的な死の意識は、通常、人々が秩序ある社会や集団の中に安住している場合には生じ難いものである。ここでは、集団の再生の可能性、連続性が無意識のうちに受容されている故に、個人の死が、決定的脅威として意識に上り、思索されることがないからである。人が何らかの理由で、それまで所属していた社会や集団から切り離され、あるいははみ出した時、自己の他に依る可きものを持たない個が生れ、個の必然的運命としての死の自覚が生じ、死が思索の対象となるのである。これは人類の歴史上、時代の変動期に特に顕著に現れる現象のように思われる。古代国家が崩壊した時、個人の死の不安に答える可く多くの哲学、様々な密儀宗教及びキリスト教が登場したし、中世の共同体が崩壊するルネサンスの時代にも、人間は極度に個人化されると同時に、限定された「時」の脅威や個の消滅としての死の脅威をあらためて鋭く意識するようになった¹¹⁾。Shakespeare はソネットの中で、大鎌を振る「時」の脅威に実

10) *Richard III*, I, iv.

11) 田中・ホイジンガ「中世の秋」(創文社、昭和33年訳)第11章「死の幻像」参照。

に屢々言及しているが、それは中世の末期から次第に個人の心の中に自覚され始めた「時」の意識が彼の時代の共通のテーマであったことを反映している。Hamlet が持つ死の意識も、広い意味では、やはり同じコンテキストの中で、即ち、中世共同体から離れたルネサンス期の個の意識の投影として把握してはば間違いないと思われる。

しかし、ここで特に注意し度いのは、Hamlet の持つ死の意識は、ソネットの「時」の意識に較べ、より主体的で、一層切迫した危機感を帯びているということである。それは中世から近代へという程大きくはないが、より身近でより切実な今一つの時代の変動、即ち、迫りつつあるエリザベス朝の終焉が当時の心ある人々に投ずる深刻な影響を、作者が鋭敏な詩人の直観で捉え、そこに意識的あるいは無意識的に反映させているからではないであろうか。中世から解放された近代人の作り出す社会は、中世的安定を失って殆んど宿命的に興隆と解体の歴史を今日まで繰返して来た。エリザベス朝期の終焉は、興隆を続けて来た英国に於ける近代社会が経験する最初の大きな曲り角を意味していたと思われる。それはジェームズ朝期を経てやがて Cromwell の革命へと進展していくのであるが、エリザベス女王の晩年に起った Essex 伯の謀反と処刑などの事件は、ある無気味な予兆として、既に人々の心に不安な暗い影を投げかけていたと推定される。この時期からいわゆる悲劇時代に入っていく Shakespeare の作中人物にも、時代の影が色濃く入り込んで来るのは当然であったろう。中世の束縛から抜け出た近代人が、新しい世界観、新しい価値観に基づいて作り出した筈の社会が、急速にその根底が崩れ、あるいはその基盤がぐらつき始める時、彼は再度己れ自身の危機的な姿に直面せざるを得なくなる。前述したように、Hamlet は、ルネサンス的価値をほぼ全面的に体现したプリンスでありながら、それらの価値が今では全く無意味になってしまったと語り、独白の中で独り己れの死に見入るのである。ここには中世の崩壊の中から出て来た個としての人間が、再び近代の崩壊に出会って立ち眩んでいるさまが感じとれる。近代人が、その栄光と挫折の歴史の中で、宿命的に繰返し直面しなければならない生の苦渋と死の深淵の意識が、ここに、既に先取りされた形で、明確に打ち出されているとも云える。400年近く前に書かれた Hamlet がかくも長い間、近代人に切実に訴えるものを持ち続けて来た秘密の一端も、あるいはその辺りにあろうかと思われる。

結びにかえて

中世末から近代初頭にかけて、ヨーロッパ全土に屢々猛威を揮った疫病の流行を乗り越えて、西欧人達は、近代の歴史を切拓き、次第に世界を支配する勢力を築き上げて行った。疫病のもたらす死の脅威が決定的な力を持つには至らず、むしろそれに抗するたくましい生の力が遂に勝利をおさめたのである。16世紀に於いても、疫病の脅威はなお止まず、死の文

学、死の芸術と呼ばれるものが数多く登場しはするが、前世紀までの、死の描写を通して生のはかなさを殊更に強調するものとは異なり、対位法的に死を前面に押し出すことによってむしろ生の躍動を浮彫りにする肯定的積極的態度が顕著に見られるようになって来た¹²⁾。悲劇という死の衣をまといながらも、全篇に生の躍動感を漲らせている Shakespeare の *Romeo and Juliet* もそのような文脈の中に置いて見る時、生を基調とする近代ヨーロッパ精神の力強い脈動と、その底流に於いて一脈相通ずるものを看取することが出来よう。

他方、近代ヨーロッパの歴史は、その旺盛な生命力による拡充と発展にもかかわらず、その内側に絶えず矛盾と自己崩壊の危機を胚胎していた。新旧思想の対立は云うまでもなく、内乱、革命、戦争等破壊的行為も枚挙にいとまがない程であり、社会の中で疎外に苦しむ人間は、いつの時代にも後を絶たなかった。生を基調とする力強い文明の内側に、同時に生の根拠を奪い、生の条件を破壊するデモーニッシュな力を内蔵する歴史でもあったのである。エリザベス朝末期に *Hamlet* を通して、人々を厭世観にまで駆り立てる様々な社会悪、不正の実態を暴くと共に、社会的に疎外され、生の根拠を奪われて自らの死をすら願望する一人の人物を描いた Shakespeare は、次のジェイムズ朝に入ると、さらに、生の条件が破壊されていくさまを、深刻な悲劇の形で、次々に描き出して行った。即ち、続いて書かれた *Macbeth*, *Othello*, *King Lear* では、それぞれ、君臣、夫婦、親子という人間の基本的関係が潰え、愛は生を支える力とはならず、死の深淵が一切を呑み尽す世界が展開するのである。

ところで、人間の生を仮りに一国にたとえるならば、*Richard II* の John of Gaunt や *King John* の Faulconbridge が雄弁に語っている通り、一国を危くするのは外敵の侵攻ではなく、むしろ内部の背信であり分裂である¹³⁾ のと同様に、人間の生にとって最も恐るべき敵は、疫病等の外敵であるよりはむしろ生の王国を内部から崩壊させる人間関係の断絶であろう。エリザベス末期という歴史の一つの曲り角に立って、自らの詩人としての鏡に映ずる生の王国の崩壊のさまでリアルに描き出した Shakespeare は、本来生の讃歌から出発し、生を基調とする近代的作家である故に、当然次のステップとして、その恐る可き敵を克服する方途を模索しなければならなかったであろう。事実、彼は、それら悲劇作品のあとに、いわゆるロマンス劇に取組み、赦しと和解による再生への道をテーマとする作品を数篇書き残すのである。当時、ジェイムズ一世の即位により既に時代は改まっていたとは云え、前世紀末からの不安と動揺の要因は解消した訳ではなく、むしろ粗野な王の治政の下で、政治上、宗教上様々な内部分裂は増大し、やがて流血革命に至る筈の社会不安が潜行した形で、進行

12) 木間瀬精三、「死の舞踏」(中公新書) p. p. 108-9 参照。

13) *Richard II*, II, i, 31-68, *King John*, V, vii, 112-8.

して行くのである。つまり、現実世界の中に、人間関係の破れを癒し、生の条件を整える要因は容易に見出せないままであった。そのような時代には、人々はメルヘンの世界に、代償を比める傾向を示すものであるが、(当時、人々の好みは悲劇からロマンス劇へ移ったと云われる)、Shakespeare もまた、その切実な内心の希求を、ロマンス劇という形に仮託して語らざるを得なかったものと思われる。

彼の描いたロマンス劇の中で、死と再生の問題を正面から取扱ったものは *Pericles* と *The Winter's Tale* であるが、殊に後者は、作者の再生のヴィジョンが最も象徴的に、完成された形で描かれている。その中で、本論のテーマと関連して特に取上げておきたいのは、*Hermione* の仮死と16年後の再生についてである。夫 *Leontes* の狂気と不正によって仮死状態に陥った彼女は、夫が狂気から醒め、自らの邪悪な行為を痛切に悔いた後も、夫の許に帰ることは許されず、16年後、失われし者 (*Perdita*) が回復された時始めて、蘇って人々の前に生きた姿を現わすのである。確かに彼女の不幸は夫の悪によってもたらされた。しかし一旦破壊された彼女の生は、単に倫理的レベルの後悔や懺悔だけでは元に戻らない。今一つ深いレベル即ち存在のレベルに於いて、生を可能ならしめる条件、即ち失われたすべての関係が元通りに回復されて始めて彼女は生きることが出来るのである。この描き方は暗示深い。というのは、この *Hermione* の姿には、生の根拠を奪われ、絶えず自らの死をみつめながら、遂に死んで行った *Hamlet* の逆写し、即ちネガに対するポジの姿があり、人間の生死を最も根源的に捉えつつ、しかも究極的には死ではなく、生の可能性を探り続けたルネサンス人 Shakespeare の面目が、最も端的に現れているように思えるからである。